

『更級日記』における『源氏物語』の浮舟

— 孝標女らしき人とのずれをめぐって —

有馬 義貴

一 はじめに

『更級日記』には、その冒頭から『源氏物語』への意識がみえている。

【更級①】

あづま路の道のはてよりも、猶奥つかたに生ひ出でたる人、いか許かはあやしかりけむを、いかに思ひはじめける事にか、世中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところづかたるを聞くに、いとゆかしきさまされど、わがおもふまゝに、そらにいかでおおぼえかたらむ。

(二七二)

傍線部の「光源氏のあるやうなど」の表現も勿論『源氏物語』を想起させるものであるが、それ以前の起筆部分も、「常陸帯の一首を引きながら、「あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人」と、浮舟よりも更に草深い奥地から、おぼろに三人称化した自己を登場させ、「いかばかりかはあやしかりけむを」と、自嘲めいた言葉を添えて「身物語」の筆を起したものである」というように、『源氏物語』の浮舟が意識された表現であるとみられている。『更級日記』中で孝標女らしき人の浮舟への憧憬がたびたび述べられていることから、それは認めてよいものであると思われる。

但し、「彼女の実人生が、浮舟の瞬時の幸に較ぶべくもなかつたとする意識は、執筆時の作者の心を深く領していたものようである」^③といったように、浮舟への意識を「作者の心」などと結びつけることについては慎重になるべきであろう。例えば、藤田彰子氏は、「更級に於ける浮舟は、作品主題の形象に資すべき役割を担わされている」「一つの手法的存在と言つてよいのではないだ

ろうか」、「それを一貫してとり込むことによつて更級固有の生をより鮮やかに形象するという、一つの手法としてあるのではないか」^①とされ、また、和田律子氏は、その藤田氏の指摘を踏まえられつつ、『更級日記』に書かれた浮舟は、作者が自分の姿を重ねた女君ではなく、作者が『更級日記』の主人公の姿を作り上げるためにイメーヂを利用した存在ではなかつただろうか。作者は、東国と浮舟を巧みに取り込み利用して、浮舟を重ねた（ひと）を主人公とした物語世界を構想した。それが『更級日記』ではないのだろうか^②と述べられている。そのように、浮舟への意識を「作者の心」そのものであるとはみず、「一つの手法」として捉える見方もありえよう。「物語作者としての孝標女の、したたかなもくろみ」^③といった捉え方などもあるところである。

とはいえ、勿論、「作者の心」そのものではありえないなどと言いつてしまうこともまたできないのであり、このあたり、断定的なことは言い難いところであるように思われる。「手法」といつた捉え方にしてもそうだが、「作者」の心情や意図などの有無を判断するということは容易ではない。そこで、本稿では、「作者の心」などを読むべきか否か、意図的な「手法」であるか否かといった問題についてはひとまず措き、『更級日記』を読む際に、浮舟に關してどのようなイメーヂや場面などが喚起されるかを確認した上で、それが『更級日記』においてどのように機能しうるのか、という点について考察していくことにしたい。

二 「かくし据ゑ」られる浮舟への憧憬

『更級日記』において浮舟の呼称が初めて見えるのは次の場面である。

【更級②】

はしるく、わづかに見つゝ、心もえず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内（うち）にうちふして、ひきいでつゝ見る心地、（の）のくらゐも何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火をちかくともして、これを見るよりほかの事なければ、おのづからなどは、そらにおぼえうかぶを、いみじきことに思ふに、夢に、いとよげなる憎の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華經五の巻をとくならへ」といふと見れど、人にもかたらず、ならはむとも思ひかけず。物語の事をのみ心にしめて、われはこのごろわるきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじくながくなりなむ。光の源氏の夕顔、（宇治の大將の）浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとほかなく、あさまし。
(三八五〜六)

この場面には傍線部のように「法華經五の巻をとくならへ」という言葉も見えているが、『源氏物語』において「法華經」の語が浮舟に關連して用いられているのは次の箇所に限られる。

〔源氏A〕

思ひよらずあさましきことゞもありし身なれば、いとうとまし、すべて朽木などのやうにて、人にも見捨てられてやみなんと思へば、ありがたきまでなさげなくもてなし給ふ。さるは、月ごうたゆみなくものをのみ思ひむすほはれ給ひつるを、この本意のことし給ひて後よりは、すこしはれくしうなりて、尼君とはかなぎ戯れごとなど言ひかはし、基など打ちてぞ明かしくらし給ふ。行ひもいとよくしつゝ、法華経はさらなることにて、こと経ふみなどもいとよく読みとり給ふ。雪いたく降り積み人目たえたるころぞ、げにいと思ひやる方なかりける。

(手習・三七六く七)

「手習」巻で、出家した浮舟が「法華経」などを読んでいることが語られる場面である。また、【更級②】における「法華経五の巻をとくならへ」というのは、「法華経」第五巻には女人成仏が説かれていた。一般に女人は成仏できないとされていた当時、この五巻は特に尊ばれていた」とされるように、「法華経」の説く女人成仏と関わるものであろうが、「手習」巻でもそうした女人成仏(竜女成仏)に関する記述が横川の僧都の言葉にみえる。

〔源氏B〕

「……田舎人の娘などもさるさましましたるこそは侍らめ。竜の中

より仏生まれ給はずはこそはべらめ、たゞ人にてはいと罪輕うはべる人さまになん侍りけるを」など申し給ふに……

(手習・三七二)

これらの点からすると、【更級②】の場面では「手習」巻が想起されうることになろうか。女人成仏を説く法華経を習えとする「いとよげなる僧」は、あるいは横川の僧都を想起させるものかもしれない。但し、ここで孝標女らしき人は、「ならはむとも思ひかけず」として、浮舟のように法華経を習おうとはしていない。また、孝標女らしき人は「髪もいみじくなくなりなむ」と考えているが、「手習」巻で語られていたのは、浮舟が髪を切つて出家したことであつた。ここでは孝標女らしき人と浮舟とのずれが浮かび上がるとみるべきであらうか。あるいは、浮舟のごとく出家して法華経を習うような将来などが予感されるものとみることのできるのかもしれないが、そのあたり、どうみるべきかは断じがたい。

浮舟を憧憬する理由などについても明言されてはいないところであり、ここでの浮舟についてはまだ明確なイメージを喚起するまでには至っていないとも考えられる。勿論、ともに挙げられている夕顔との共通のイメージが抽象的に喚起されることなどはありうるのだろうが、「更級日記」中で浮舟のイメージがはつきりと示されるのは、次の場面においてであらう。

【更級③】

かやうに、そこはかなきことを思ひつゞくるを役に、物詣でをわづかにしても、はかしく、人のやうならむとも念ぜられず。このごろの世の人は、十七八よりこそ、経よみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず。からうじて思ひよることは、いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年にひとたびにてもかよはしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ほそげに、めでたからむ御文などを、時々待ち見などこそせめ、とばかり思ひつゞけ、あらまし事にもおぼえけり。

(三九八)

孝標女らしき人の願望がより明確に述べられているところである。ここで浮舟は「山里にかくし据ゑられ」る女性として引き合いに出されてくる。同様のことは、次の波線部、結婚後の感慨についてもいえる。

【更級④】

その後は、なにとなくまぎらはしきに、物語のこともうちたえ忘られて、物まめやかなるさまに心もなりはて、ぞ、などで、多くの年月を、いたづらにて臥し起きしに、おこなひをも物詣でもせざりけむ、このあらましごととても、思ひし

ことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは、薫大将の宇治にかくし据ゑ給ふべきもなき世なり、あな物ぐるほし、いかによしなかりける心也、と思ひしみはてて、まめくしく過ぐすとならば、さてもありはてず。

(四一〇)

その呼称自体はみえないが、「薫大将の宇治にかくし据ゑ給ふ」女性として、浮舟が引き合いに出される形となっている。浮舟が実際に『源氏物語』において「かくし据ゑ」られる女性として象られていることについては井野葉子氏の御論などに詳しく、また、井野氏は、【更級③】・【更級④】の各波線部を引きつつ、『更級日記』の作者は、浮舟物語が「薫が浮舟を隠し据ゑる物語」であることを端的に見抜いている、「浮舟に憧れる孝標女は」「短い記述の中にも鍵語「隠し据ゑ」を二度も使って浮舟物語の本質を表現し、受領階級の女が高貴な男性によって密かに山里に隠し据ゑられることの甘美な陶醉を主観的に読み取っている」とも述べられている。前節で述べた通り、「作者」などの問題についてはひとまず措くが、【更級③】・【更級④】の場面において、浮舟が貴公子によって「隠し据ゑ」られていた女性として焦点化されていることは明白であろう。

『更級日記』中で浮舟について述べられる最後の場面も掲げておく。

【更級⑤】

今は、昔のよしなし心もくやしかりけりとのみ思ひしりはて、親の物へ率て参りなごせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば、今は、ひとへにゆたかなるいきほひになりて、ふたばの人をも思ふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山につみあまるばかりにて、後の世までのことをも思はむと思ひはげみて、霜月の廿余日、石山に参る。…(中略) …そのかへる年の十月廿五日、大嘗会の御禊とのゝしるに、初瀬の精進はじめて、その日、京をいづるに、…(中略) …ひたぶるに仏を念じたてまつりて、宇治の渡りに行き着きぬ。…(中略) …無期にえ渡らで、つくぐと見るに、紫の物語に宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかき所かなと思ひつゝ、からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿に入りて見るにも、浮舟の女君の、かゝる所にやありけむなど、まつ思ひ出でらる。

(四一七〜二〇)

初瀬詣での中宿りで宇治を訪れた際の感慨である。「隠し据う」といった文言はないが、宇治という地で「浮舟の女君の、かゝる所にやありけむなど、まつ思ひ出でらる」とあることで、【更級③】「山里にかくし据ゑられて」、【更級④】「宇治にかくし据ゑ給ふ」などと述べられていた浮舟のありようなどが想起されてくるころではあるろう。

『更級日記』の浮舟については、「隠し据ゑ」られる女性として焦点化される側面があるものと認められる。それ自体はほとんど自明のことかとも思われるが、注目されるのは、孝標女らしき人について、そのような浮舟とのずれが際立つような表現が『更級日記』中にみられることである。先の【更級④】は、次のような場面に続くものであった。

【更級⑥】

母、尼になりて、おなじ家の内なれど、方ことに住みはなれてあり。父は、たゞ我をおどなにし据ゑて、我は世にも出でまじらはず、かげにかくれたらむやうにてゐたるを見るも、たのもしげなく心ほそくおぼゆるに、きこしめすゆかりある所に、「なにとなくつれづれに、心ほそくてあらむよりは」と召すを、古代の親は、宮仕へ人はいと憂き事也と思ひて、過ぐさするを、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さてもおのづからよきためしもあり。さても心見よ」といふ人々ありて、しぶくりに、出だしたてらる。…(中略) …かうたち出でぬとならば、さても宮仕への方にもたちなれ、世にまぎれたるも、ねぢけがましきおぼえもなきほどは、おのづから人のやうにもおぼしてもなさせ給ふやうもあらまし。親たちも、いと心得ず、ほどもなくこめ据ゑつ。さりとして、そのありさまの、たちまちにきら／＼しき勢ひなどあんべいやうもなく、いとよしなかりけるすゞる心にてても、ことのほかに違ひぬる

ありさまなりかし。

幾千たび水の田芹をつみしかば思ひしことつゆもかな
はぬ

とばかりひとりごたれてやみぬ。

(四〇五〜九)

ここでは、孝標女らしき人が父親によつて「おとなにし据ゑ」られたこと、すなわち、「出家した母に代つて家事万端をとりしきる主婦の地位」に据ゑられたこと、そして、人からのすすめによつて宮仕えに出るも、その後、親たちによつて「こめ据ゑつ」という処置をとられたことが述べられている。「こめ据ゑつ」は結婚を暗示する表現であるとみられるが、これは、直後の【更級④】にみえる「薫大将の宇治にかくし据ゑ給ふべきもなき世なり」という表現や、また、既に【更級③】にみえていた「浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて」という表現などと響き合うものであるといえよう。浮舟が貴公子によつて「かくし据ゑ」られる女性として焦点化され、引き合いに出されることで、孝標女らしき人が「父」によつて「おとなにし据ゑ」られ、更に、「親たち」によつて「こめ据ゑ」られていくというありやうが、対照的に浮かび上がってくるのである。

そして、パロディのごとくずれている、このような浮舟と孝標女らしき人とのありやうを意識するとき、既にみた【更級③】や【更級⑤】の場面などについても、それに通ずる意味合いを持つものとして捉え直されてくるように思われる。次節で確認してい

きたい。

三 浮舟と孝標女らしき人とのすれ

【更級③】から振り返つていく。この場面では、波線部の直前に「年にひとたびにてもかよはしたてまつりて」とあるが、しばしば指摘されるように、これは次のC→Eのような『源氏物語』の表現を喚起するものである。

〔源氏C〕

世人のなびきかしづきたてまつるさま、かう忍び給へる道にもいとこといつかしきを見給ふにも、げに年に一夜のちぎりなりとも、かゝらん彦星のひかりをこそ待ち出でてみめとおぼえけり。
(総角・四三四)

〔源氏D〕

「勾宮の」こよなき御けはひを見るに、あはれ、…(中略)
…この御ありさまかたちを見れば、七夕のちぎりにてもかうやうにみたまつりかよはんは、いみじかるべきわざかなとおぼゆ。
(東屋・一四二〜三)

〔源氏E〕

…この「薫の」御ありさまを見るには、天の川を隔て、も

かゝらん彦星ひこぼしのひかりをこそ待ちつけさせぬ、わがむすめ、
はた、なのめならん世よの常つねの人に見せんは惜しげなるさまを、
えびすめきたる人ひとのみならひて少将をかしこきものに思ひ
けると、くやしきまで思ひなりぬ。
(東屋・一五一)

加藤昌嘉氏の指摘されるように、「総角」巻の一節は、保坂本・陽明文庫本・平瀬本・尾州家本でこそ「年に一夜のちぎりなり」とも「とか」年に一夜のちぎりにても」となっているが、大島本・池田本・日大三条西家本などでは「七夕ばかりにても」となっていて、後者の場合、『更級日記』との繋がりが見出し難くなる¹³⁾。そのため、例えば、「年に一たびにても」という七夕をふまえた表現は既に総角巻で匂宮を見た姫君たちの感想にもあったが、浮舟の母中將の君の、匂宮・薫を見ての言葉により依存している¹⁴⁾というように捉えられがちであったわけである。だが、『更級日記』が保坂本のような『源氏物語』本文を撰取している可能性が高いとするならば¹⁵⁾、【更級③】の場面では、『源氏D』・『源氏E』のみならず、『源氏C』についても喚起されうるものとみるべきであろう。

但し、どれが喚起されるにしても、同様のずれを見出しうることにはなる。「七夕」や「彦星」によそえた願望は、『源氏C』においては親代わりのような意識で中の君を世話する大君の願望として¹⁶⁾、また、『源氏D』・『源氏E』においては浮舟の母親である中將の君の願望として語られており、いずれの場面においても、

貴公子の相手となる女君自身の願望としては語られていない。すなわち、孝標女らしき人と重なるのは、中の君や浮舟といった女君たち本人ではなく、その庇護者にあたる人たちということになつてしまふのである。

ちなみに、加藤氏は、『更級日記』中の次の場面についても、保坂本のような「手習」巻(後掲『源氏F』)を撰取した可能性を指摘されている。

【更級⑦】

……十月ついたちごろの、いと暗き夜、不断経に、声よき人
くよむほどなりとて、そなた近き戸口に、二人ばかりたち出
でて聞つ、つ、物語して、より臥してあるに、まゐりたる人
のあるを、「にげいりて、局なる人く呼びあげなどせむも見
ぐるし。さはれ、たゞ折からこそ。かくてたゞ」といふいま一人
のあれば、かたはらにて聞ゝゐたるに、おとなしくしづやかな
なるけはひにて物などいふ、くちをさしからざなり。「いま一人
は」など問ひて、世のつねのうちつけのけさうびてなどもい
ひなまず、世中のあはれなることゞもなど、こまやかにいひ
いでて、さすがにきびしう引き入りがたいふしぐありて、
我も人もこたへなどするを、「まだしらぬ人のありける」など
めづらしがりて、とみにたつべくもあらぬほど、星のひかり
だに見えず、暗きに、うちしぐれつ、木の葉にかゝる音のを
かききを、「なか〜に艶なつにをかきき夜かな。月の隈なく明々

らむも、はしたなく、まばゆかりぬべかりけり。」

(四一二〜三)

《源氏F》

正身の心地はいさゝかものおぼえて見まはしたれば、一人見し人の顔はなくて老いゆがみたる衰へ人のみぞある。知らぬ国に來にける心地していとかなし。：(中略)：いかにしていづくに來にけるにかあらむと、せめて思ひ出づれば、いとみじともを思ひ嘆きてみな人の寝たりし間に、妻戸をやをら放ちて出でたりしに、空はいと暗くて、星のひかりだに見えざりしに、風の音は、げしくて、川波も恐ろしう聞こえ、

(手習・三三六)

「空はいと暗くて、星のひかりだに見えざりしに」という本文を持つのが『源氏物語』諸本の中で、「保坂本と歴博本に限られる」ことなどを踏まえた重要な指摘であるが、ここについても、浮舟が、薫や匂宮といった貴公子たちとの恋の末に、ひとり戸外の恐ろしさを感じているのに対して、孝標女らしき人は、物語の貴公子のような資通と、恋の予感をも漂わせる風雅な語らいをしつつ(しかし実際に恋に発展することはない)、戸外の趣深さを感じている、といったように、表現の重なりとは裏腹な対照的なありようをみることができよう。

『源氏物語』との対照性は、前節でみた【更級⑤】、すなわち初

瀬詣での場面に関しても見出すことができようである。藤田氏は、「更級は、中年期に「物詣の記」を置き、信仰への傾倒を強調する。それは、自ら出家生活を選び取った浮舟の姿との対照性に於て鮮明な形象なのではないだろうか」とされ、「両作品にとつて大きな位置を占める初瀬について」、「浮舟は、現世利益の初瀬信仰を否定し」、「妹尼の誘いもはつきり断わる」が、「一方、更級に於ては初瀬は現世利益をもたらすものとして一貫してある」ということを述べられている¹⁷⁾。首肯される場所であるが、この部分については更に、振り返られる過去と現在の状況においても、孝標女らしき人と浮舟との対照性を見出しうる。『源氏物語』「手習」巻において、妹尼の誘いを断り、初瀬への参詣を拒む浮舟のようすは次のように語られていた。

《源氏G》

九月になりて、この尼君、初瀬に詣つ。：(中略)：(妹尼)「いざ給へ。人や知らむとする。同じ仏ときこゆれども、さやうのところに行ひたるなむ験ありてよきためし多かる」など言ひてそゝのかしたつれど、昔、母君、乳母などのかやうに言ひ知らせつゝたび／＼詣でしかど、かひなきにこそあめれ、命さへ心にかなはず、たぐひなくいみじき目を見るはといと心うきうちにも、知らぬ人に具して、さる歩きをしたらむよと、それも恐ろしくおぼゆ。(手習・三五五〜六)

ここで浮舟は、傍線部のように、かつて母親や乳母がたびたび初瀬に連れて行つてくれたのに、そうしてお参りをした甲斐もないような今の身の上ではないかと思つている。そのように過去を振り返りつづつ初瀬詣でを拒む、浮舟のありようは、『更級⑤』のはじめに、「親の物へ率て参りなどせでやみにしも、もどかしく思ひ出でらるれば」とある孝標女らしき人のありよう、すなわち、母親が物詣でに連れて行つてくれなかつた過去を振り返り、自ら初瀬詣でなどを実行していくありようと対照的である。

なお、浮舟という呼称が見えるわけではないが、次の『更級日記』の場面についても『源氏物語』『手習』巻の撰取が指摘されている。

【更級⑧】

あづまにくだりし親、からうじてのぼりて、西山なる所におちつきたれば、そこにみな渡りて見るに、いみじう、れしきに、月のあかき、夜ひとよ、物語などして：（中略）：東は、野のはるぐとあるに、東の山ぎは、比叡の山よりして、稻荷などいふ山まであらはに見えわたり、南は双の丘の松風、いと耳近う心ぼそきこえて、内には、いたゞぎのもとまで、田といふものゝ、引板ひきならず音など、田舎の心地して、いとをかしきに、月の明き夜などはいとおもしろきを、ながめあかしくらすに、知りたりし人、里遠くなりて音もせず。たよりにつけて、「なにごとかあらむ」とつたふる人におどろ

きて、

思ひ出でて、人こそ訪はね山里のまがきの萩に秋風は吹くといひにやる。十月になりて、京にうつろふ。（四〇四〜五）

傍線部「引板ひきならず音など」という表現が、次のように、浮舟が小野の山里の風景を眺める場面にもみられるのである。

【源氏H】

昔の山里よりは水の音もなごやかに、：（中略）：秋になりゆけば空のけはひあはれなるに、門田の稻刈るとて、ところにつけたるものまねびしつゝ、若き下衆、女などは歌うたひ興じあへり。引板ひきならず音なども思ひ出でらる。かの夕霧の御息所のおはしたりし山里よりはいますこし入りて山に片かけたる家なれば松原のしたにて風の音もいと心ぼそし。つれぐと行ひをしつゝ、いつとなくしめやかなり。

（手習・三三九〜四〇）

藤田氏は、『更級⑧』の「田といふもの」「田舎の心地していとをかし」という記し方には、自身は都に属するものとして、山里を相対的に捉える姿勢が示されている。都人としての視点の在所が明らかにされていると言えよう。ひなびの外側に立ち、歌によつて他者とながりを持とうとするみやびの中に、父隠退の心細きをも閑却する、という形になっている」とされ、「みやびへの志向

から今は現世に絶望している浮舟の、わずかに無心の傾を思い出して慰めている姿と、みやびへの憧憬になおとどまる更級の生との差異が明瞭に形象されている」と述べられている¹⁰⁾。そのような対照性を認めなかったとしても、ここについては、見知らぬ人々のもとで暮らすことになった浮舟に対して、父親が上京して家族で暮らすようになった孝標女らしき人というような違いも見出される。また、浮舟が暮らしたのは小野の山里であったが、それは、【更級⑧】で「西山なる所」から「東の山ぎは」として遠くに見えている「比叡の山」の麓にあたる場所でもあった。最後に「京にうつるふ」とあるように、この後に京へと帰っていく展開なども浮舟とは異なるところである。

更に、井野氏が、「引板の描写の直後で「知人のことを忘れていた孝標女を知人が音信によつて驚かす」という構成は、明らかに【古今六帖】「二八八六番歌に抛つていと思われ」と、【更級⑧】の場面に「あしひきの山田の引板のひたぶるに忘るる人を驚かすかな」という歌が踏まえられていることを指摘されている¹¹⁾。点も注目される。井野氏は、その「音信による驚かし」を連想させる『古今六帖』の歌について、「手習」巻においては、「男たちを「忘れ」ようとする浮舟を、中将や薫が手紙や訪問によつて「驚かす」物語が展開していく」といった、「今後の展開を予告する機能を果たすのではないか」とも述べられている¹²⁾。それらをあわせて考えるならば、「引板の描写」の後の「音信」が貴公子からのものではないという点に『源氏物語』と『更級日記』の違いを見出すこ

とや、また、【更級⑧】の「思ひ出でて人こそ訪はね山里のまがきの萩に秋風は吹く」という歌が、『源氏物語』における中将の来訪や薫の使者である小君の来訪などを喚起しうるものと解することなどもできようか。貴公子やその使者の来訪といった、浮舟の物語のような展開のないまま、孝標女らしき人は京へと帰ることになる。

また、この「萩」「秋風」を詠み込んだ歌は、『更級日記』中でこれ以前にあった、「笛の音のただ秋風と聞こゆるになど萩の葉のそよとこたへぬ」という歌を想起させはしないだろうか。次の場面では詠まれた歌である。

【更級⑨】

その十三日の夜、月いみじく隈なく明きに、みな人も寝たる夜中許に、縁に出であて、姉なる人、空をつくくとなかめて、たゞ今、ゆくへなく飛ひうせなば、いかゞ思ふべき」と問ふに、なまおそろしと思へるけしきを見て、こと事にいひなして、わらひなどして聞けば、かたはらなる所に、さきおふ車とまりて、「萩の葉、く」と呼ばすれど、答へぎなり。呼びわづらひて、笛をいとをかしく吹きすまして、過ぎぬなり。

笛の音のたゞ秋風と聞こゆるになど萩の葉のそよとこたへぬ

といひたれば、げにとて、

萩の葉のこたふるまでも吹きよらでたゞに過ぎぬる笛の

かやうに、^ね音ぞ^あ憂^きぎ
かやうに、明くるまでながめあかいて、夜明けてぞみな人寝
ぬる。
(三八九〜九〇)

この場面についても、例えば、波線部のような「姉なる人」のありようが、「手習」巻でかぐや姫に引き比べられている浮舟を喚起し、また、「かたはらなる所」における出来事が、中将と浮舟のありようを喚起するというように、『源氏物語』『手習』巻との関連が指摘されている。²⁵「みな人寝ぬる」という最後の文についても、「手習」巻で「みな一つ所に寝にけり」(手習・三六〇)とあること、すなわち、「浮舟のかたくなな拒絶の結果、浮舟を諦めた中将が京に帰ったとき、浮舟が尼たちに誇られながらも尼たちと共に寝る場面と重なり合う」とされる。そのような重なりを認める場合、ここでは、浮舟に重なるのがあくまで「姉なる人」であつて孝標女らしき人ではないという点、また、そもそも中将と浮舟を喚起するような男女のありようも「かたはらなる所」での出来事に過ぎないといった点などが注意されよう。更に言えば、和田氏が、「かぐや姫を見つげたりけんよりもこれはめづらしき心地するに、いかならむものゝひまに消えうせんとすらむと静心なくぞおぼえける」(手習・三三九)といった妹尼の不安を踏まえられつつ、「姉が、七月十三日の夜、月を眺めて「ただいまゆくへなく飛び失せなば」とつぶやき、妹はそれを不吉なこととして不安に思つた。それは、「手習」巻で浮舟を世話していた尼が浮舟の身を案じ、

かぐや姫のように消え失せてしまつたらどうしようと思う構図と近似してはいないのであるだろうか」と述べられている²⁶ように、ここで孝標女らしき人と重なるのは妹尼であるとも考えられる。すなわち、本節のはじめに見た、「年に一たびにても通はしたてまつりて」のケースと同様、浮舟本人ではなく、その庇護者にあたる人物に重なるということになるのである。

四 おわりに

以上、『更級日記』中で『源氏物語』の浮舟が喚起されると考えられる箇所について確認してきたが、そのいづれにおいても、孝標女らしき人が浮舟とそのまま重なるということとはなかつた。浮舟のように貴公子に「かくし据ゑ」られるのではなく、親たちに「こめ据ゑ」られていくといったありようをはじめとして、孝標女らしき人は、浮舟を憧憬しながら、しばしば浮舟と対照的な状況に置かれてしまうのである。また、ときに、浮舟本人ではなく、その庇護者にあたる人物に重なるような立場になつてしまふなどもある。そのようなあやにくな形で浮舟からずれてしまふ孝標女らしき人のありようを看過すべきではないだろう。『更級日記』における孝標女らしき人を、浮舟を憧憬しながらそうはなれなかつた女性などと単純に位置づけることはできないのである。『更級日記』の浮舟は、孝標女らしき人のありようを相対化し、そのあやにくさを照らし出すもの、浮き彫りにするものとして機能してい

るのだと考えられる。

なお、第一節において、「手法」であるか否かといった問題についてはひとまず措くとしたが、ことごとくあやにくな形で浮舟とずれてしまっている孝標女らしき人のありようなどをみると、それを意図的なものとして考えてみたくなるころではある。重なりとずれというより、重ねあわせとずらしとして捉えたくなるのであり、「更級日記」について、孝標女の実人生の回想、「作者の心」がそのまま述べられたもの、といったようにはなく、それを装いつつ創作されたもののように読みたくなるのである。

とはいえ、やはりその判断は容易ではなく、そもそも二者択一のような形で処理すべき問題ではないようにも思われる。また、浮舟以外についても指摘される『更級日記』の『源氏物語』撮取や、『源氏物語』以外の先行文学の影響などを捨象して論ずることの危うさもある。先に見た【更級②】に「光の源氏の夕顔」、【更級③】に「物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を」と、光源氏などへの言及もあることや、第三節で取り上げた（源氏C）が浮舟ではなく大君・中の君に関する記事であったこと等々、本稿で取り上げた箇所に限っても、さまざまに検討の余地を残している。今後、機会を改めて考えたい。

注

(1) 以下、『更級日記』の引用本文は『御物本 更級日記(完)』(武蔵野

書院)、『源氏物語』の引用本文は『保坂本源氏物語』(おうふう)に拠り、適宜、かなや漢字の表記を改め、濁点・句読点・鉤括弧・傍線等を付した。底本の表記はルビで示し、送り仮名などとして底本にない文字を補った場合には傍点・「・」によつて示した。本文中の()や「」内の注記は全て引用者によるものである。また、本文の後の()には便宜上、新日本古典文学大系(岩波書店)の該当頁数を、『源氏物語』については巻名も)示した。

(2) 新編日本古典文学全集(小学館)解説、三七五頁。「常陸帯の一首を引きながら」とあるのは、「この冒頭は「あづま路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」(古今六帖・五 紀友則)を引歌とする。」(新編日本古典文学全集、二七九頁頭注一)という解釈による。なお、先ごろ刊行された福家俊幸氏『更級日記全注釈』(角川学芸出版、二〇一五年二月)の語釈(一一〜二頁)では、宮仕え先(祐子内親王家)での孝標女の「候名(女房名)」が「常陸」であった可能性などを踏まえ、「孝標女の候名が常陸である」とすると、この冒頭は間接的な名乗りであったと位置づけることができるだろう。彼女の候名が常陸であったとすれば、浮舟引用も彼女の内面的な問題に限定されない問題を浮上させるように思われる」と指摘されている。本稿校正時に拝読した関係で注での引用のみとなつてしまつたが、非常に重要な視点であると思われる。

(3) 新編日本古典文学全集(小学館) 三七五頁。

(4) 藤田彰子氏『更級日記における浮舟——形象の方法とその意味——』

『中古文学論攷』一九八六年一〇月。

- (5) 和田律子氏「『更級日記』の冒頭部——執筆の意図——」(『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年。初出は、『立教大学日本文学』一九九八年七月)。和田氏は同書の第二部「(場)の文学としての『更級日記』」において、『更級日記』における『源氏物語』摂取についてさまざまに論じられ、先行研究の整理もされている。

(6) 塩田公子氏「『浮舟』とは違う女の一生——『更級日記』を物語として読む——」(『古代文学研究 第二次』一九九六年一〇月)。

(7) 新編日本古典文学全集(小学館)、二九八頁頭注一七。

(8) このあたり、注(4)藤田氏前掲論文においても示唆されている。

(9) 井野葉子氏「隠す／隠れる」浮舟物語」(『源氏物語』宇治の言の葉』森話社、二〇一一年。初出は、『源氏研究』第六号、翰林書房、二〇〇一年)。

(10) 新編日本古典文学全集(小学館)、三二四頁頭注四。

(11) 石川徹氏「菅原孝標女の結婚に就いて」(『古代小説史稿——源氏物語と其前後——』刀江書院、一九五八年。初出は、『日本文学研究』一九五〇年五月)、鈴木弘道氏「更級日記「こめすう」の語義と「いくちたび」の歌についての疑問」(『平安文学研究』一九五五年六月)。

(12) 注(2)福家氏前掲書の語釈(二二三頁)でも、「また前(三十七段)に孝標女は高貴な男性によって山里に「隠し据ゑ」られる夢を記していたが、現実においては実家に「籠め据ゑ」られたという対

置を構造化することになる。そこにおのずから自嘆の念が揺曳するよう工夫された一文であったと思われる」と述べられている。

また、伊藤守幸氏「『更級日記』と『源氏物語』」(『更級日記研究』新典社、一九九五年。初出は、『菊田茂男教授退官記念日本文芸の潮流』おうふう、一九九四年)においても、「たとえば『更級日記』では、宮仕えを中断して家の内に「籠め据ゑ」られることになった経緯を記し(それによって結婚を暗示し)、その直後に次のような述懐を置いていたわけだが」「(次のような述懐)とは『更級④』の内容を指す)といったように示唆されている。但し、伊藤氏は続けて、「こうした述懐にしても、それは果たして『源氏物語』を全体として相対化し得るような認識を語っていると思わせるものだろうか。むしろ、すべては『源氏物語』の掌中にあると言えるのではないか」と述べられ、「宇治十帖に登場する女性達」が「しばしば恋愛や結婚に対する不信の念を表明する」といった「『源氏物語』の内実と照らし合わせるとき、『更級日記』の右の発言は、結局のところ、宇治の大君や中将の君が結婚に対して懐いていた否定的な認識を追認するものでしかなかったとも言えるのである」とされている。本稿は、『源氏物語』を「相対化し得る」か否かということではなく、むしろ、「こめ据ゑ」られる孝標女らしき人のありようを「相対化」するものとして、「隠し据ゑ」られる浮舟が引き合いに出されていると解する点において、伊藤氏の御論とは立場を異にする。

(13) 加藤昌嘉氏「星と浮舟」(『揺れ動く『源氏物語』』勉誠出版、二〇

一一年。初出は、『源氏物語の新研究——本文と表現を考える——』
新興社、二〇〇八年。

(14) 注(4)藤田氏前掲論文。

(15) 注(13)加藤氏前掲論文。

(16) 注(13)加藤氏前掲論文において、「おぼえけり」の主語を、女房たちと解する注釈書もあるが、「みたまふ」という敬語があるので、大君の心内と解するのがよい」と述べられているのに従う。なお、主語を女房と解した場合でも、中の君当人の思いではないという点については変わらない。

(17) 注(4)藤田氏前掲論文。

(18) この場面、例えば大島本には「引板^{ひた}ひき鳴らす音^{こゝろ}もをかしく、見しあづまぢのことなども思ひ出^いでられて」とある。その場合、「をかし」の語の照応も認められることになる。また、「あづまに下りし親」と「見しあづまぢ」についても、あるいは「あづま」の語の照応を見出しうるだろうか。なお、右の本文は『大島本源氏物語』（角川書店）に拠り、適宜、かなや漢字の表記を改め、濁点・句読点を付した。また、底本の表記はルビで示した。

(19) 注(4)藤田氏前掲論文。

(20) 井野葉子氏「手習巻の引板——歌ことばの喚起するもの(二)」(注(9)前掲書。初出は、『日本文学』二〇〇八年八月)。

(21) 井野氏は「歌ことば」「引板」の様々な連想の体系を手習巻の物語に導入され、『古今六帖』二八八六番歌以外に『後撰集』や『伊勢物語』などをも踏まえつつ、「歌ことば」「引板」が「多様な意味

を生み出し」うることを論じられているが、ここではひとまず『更級日記』にあてはまるものとして指摘されている要素に絞って考えてい。

(22) 柏木由夫氏『更級日記』の表現をめぐって(『平安時代後期和歌論』風間書房、二〇〇〇年。初出は、『昭和学院短期大学紀要』一九八一年三月)、和田律子氏『更級日記』の構想——「荻の葉」の段から——(注(3)前掲書。初出は、『日記文学研究誌』二〇〇四年三月)。

(23) 注(22)和田氏前掲論文。

(24) 注(22)和田氏前掲論文。

【付記】

本稿は、松戸市公民館支援・市民自主企画講座「松里(松戸)の記述もある『更級日記』を読んでみよう」第二回(二〇一三年二月一日、於流通経済大学新松戸キャンパス)及び二〇一四年度奈良教育大学国文学会研究発表大会(二〇一四年六月二一日、於奈良教育大学)における各口述内容に基づくものです。関係各位に厚く御礼申し上げます。

(本学准教授)